尚美学園大学芸術情報学部紀要　第３号

ヤナーチェクの作品とモラヴィア民謡の関連性を探る

ピアノ作品「草かげの小径」を題材として

井　上　道　子

How Janáček’s works were influenced by Moravian folk music

INOUE Michiko

Abstract

Leoš Janáček was an innovative Czech composer. Born in 1854 in Moravia, a place that gave him a lot of inspiration for his music, Janáček was so revolutionary that only a few people could understand it at the time. When we are talking about his music, it is important to consider his operas, which were composed in a very dramatic and exiting style, similar to his pieces of orchestra and instrumental music. In approaching any of Janáček’s works we have to understand, that the music notes are only the basis. His intentions, which are explained in his tempo and dynamic marks, should be considered and played with sensitivity. We can find in his music many dramas and stories. To understand his music better, there are a few possible approaches. One of them is to study his opera, as I have said. The second is to research folk music from Moravia, which influenced him very much. Therefore I’d like to explain how the influence of Moravian folk music appeared in his piano music, especially in his “ On an Overgrown Path.”

Key word: Janáček, Moravia folk music, On an Overgrown Path

「要約」

レオシュ・ヤナーチェク（1854 ～ 1928）はチェコの近代音楽を代表する、どのジャンルにも属さない独自の作法を編み出した作曲家である。それゆえ、正統派の間で長い間無視され 50 歳頃になってようやく世の中に認められるようになり、その後亡くなるまで次々に名作を発表していった。彼の音楽を語るときオペラやモラヴィア民謡なしでは語れない。交響曲や器楽曲にも必ず背景にはドラマがあり、話し言葉や人間の内に秘められた内容そのものに密接な繋がりがある。人間の持つあらゆる感情思考が音符に刻み込まれており、音楽の解釈は決して理論的であってはならない。また、彼はしばしば「瞬間の真実」を最も大事だと考え、ダイナミックスやテンポや発想記号をその場で変えたりもした。ヤナーチェク自身は“ 氷のような冷たい美とは何だろうか？　私は、どの音もただ指の運動を通して出たものではなく、燃える心を通して響いた音を聴きたい。”(注1) と言っている。ここでは、オペラを

語る以前に長年にわたってモラヴィア民謡収集家として活躍してきたモラヴィア民謡に彼の音楽表現の原点があると考え、ピアノ曲「草かげの小径」を通してその関連性を探ってみた。

キーワード：ヤナーチェク、モラヴィア民謡、草かげの小径

1．民謡収集家としてのヤナーチェク

「現在のチェコにおいても都会に住む人たちは、昔から伝わってきた民謡を知らなくなった。その土地に生まれ住んでいない限りその地域の言葉を話せないのと同じくらいにその土地の民謡を歌う事も容易ではない。」チェコの民謡曲集を出版したカレル・プリツカが、50年前にその膨大な楽譜のあとがきに記している。(注2)

ヤナーチェクは、どのように民謡は歌われるべきかについて、100年前に次のように述べている。

「民謡を歌いたい人にアドヴァイスをしたい。まず私達のチェコ民謡の伝統を守っている老人の所へ行き、歌を習ってください。彼らは貧しく時には洋服もつぎはぎだらけなのを着ています。ですから、隠れていてあまり顔も見せてくれません。でも、急いで尋ねていってください。でないと口伝えで民謡を習うということが間に合わなくなると、大変惜しいことになります。オペラ歌手の元では、それは習えないのです。」(注3)

ヤナーチェクは、チェコのモラヴィア地方にあるのどかな田園風景が広がっている村“フクヴァルディ”で1854年に生まれた。その村の小さな丘の上には今は廃墟となった“フクヴァルディ城”の城壁の跡があり、その丘の道路を隔てた所にある“マクシミリアン教会”の隣には現在も音楽教室として使われている質素な建物がある。その中でレオシュ・ヤナーチェクは生まれた。父親は、その学校の先生として活躍しており、同じく教師であった祖父は、その地域ではオルガニストとして、又歌手として名声を博していた。その影響を受けレオシュは教育熱心な環境で育ちオルガンの演奏や、モラヴィアの民謡に慣れ親しんできた。11才になった時（1865年）音楽の勉強を専門的にする為、ブルノにある修道院に入る。と同時に少年聖歌隊員にもなる。そこで、熱狂的な民謡収集家、フランチシェク・スシルに出会った。(注4)

折りしも国民学派運動の波が復興し始めた頃でスシルの影響を受け、ヤナーチェクの師でもあった聖歌隊指揮者フランチィシェク・クシィシュコフスキーも民謡の収集には大変積極的であった。レオシュ・ヤナーチェクはそのクシィシュコフスキー(注5)のもとで4年間学びその後教員になった。その傍ら25歳まで殆どブルノで過ごし、クシィシュコフスキーの助手としてオルガンを演奏し、聖歌隊の指導に当たり、作品の創作にも意欲を燃やした。短期間ではあるが、ライプチッヒやウィーンにも留学し、クラシック音楽に必要な全ての授業を受講してみた。しかし、すでにかなりのレベルまで達していた彼は、どれにも満足できず失望してしまう。しかも、ウィーンの作曲家コンクールに出した作品もことごとく認められず、

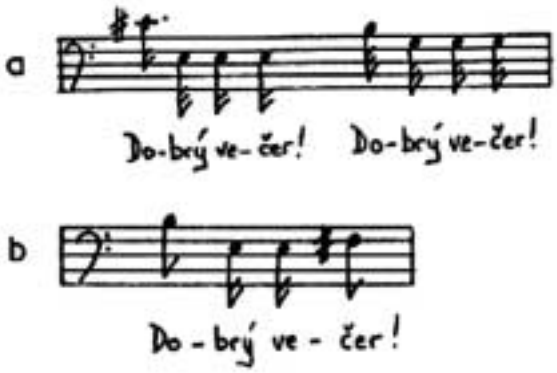
本論文冒頭

「自分自身の教師は自分自身でしかありえない」と悟り、原点に戻って自国の言葉と民族音楽を探求していこうと考えブルノの町に戻る。

そして、ヤナーチェク独特の作曲法や音楽を編み出していく事になるのである。

K.エルベン(注6)が書いた「チェコの伝統的な歌とことわざ」や、スシルの「モラヴィアの民謡収集楽譜」をよく研究したが、とりわけＦ.バルトシュ(注7)と出会ったとき、彼の民謡に対する情熱は専門的なものになった。バルトシュは音楽家ではなかったので、ただ歌のテキストを書き、音を採るのは何時も誰かの助けを必要としていた。そこでヤナーチェクとの共同作業で民謡を収集し、民族舞曲の採集と分析を行い、後には“モラヴィア民謡集”を出版している。(注8)

オーストリーの民謡中央委員会のヨゼフ・ポメル(注9)が「民謡の収集とスケッチの手引き」(注10)で収集家達に民謡の収集方法をアドヴァイスしている。「民謡収集家は、例えばハ長調、ニ長調、ヘ長調、ト長調といった簡単な調に書き換えるべきである。」と述べているが、ヤナーチェックはそれに反論して「民謡を書き写すときは、その歌われた調で書き写すべきである。そうする事によって、ただ歌の内容や表情だけでなく、人間の性格まで写し取る事が出来るからである。」と述べている。(注11)彼は、常にメモ帳を持ち歩き、どんなところでも写し取った。筆記用具を持ち合わせていない時は、ワイシャツのカフスに書き込んだという有名なエピソードが残っている。ヤナーチェックは民謡のみならず、民族舞踊、民族楽器の収集にも没頭し、知識を広めていった。更には人々の話し言葉をもメモし、その言葉の抑揚、リズム等で人間の性格、その瞬間の感情などを汲み取る事をした。例えば、挨拶言葉の「こんばんは」、チェコ語では「ドブリィー・ヴェチェル（dobrý večer）」を楽譜に書き残し、そのイントネーションで、それぞれの心の中を読み取る事をした。(注12)

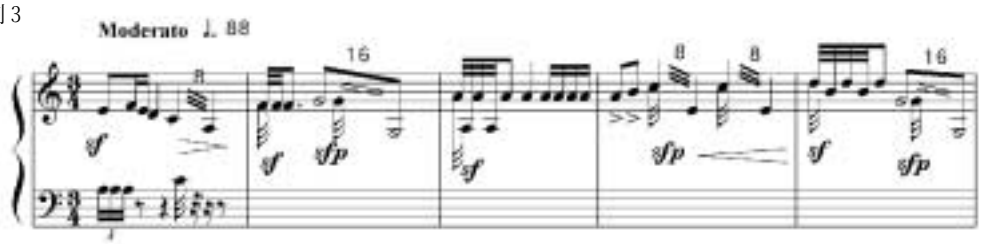


ヤナーチェクは1928年に発行された雑誌「文学の世界から」に次のように述べている。「誰かが私に話しかけているとき、例えば私はその人が何について話しているかが分からなかったとしても、どのようなイントネーションで話しているかに注目する。そこで私は、すぐさまその人がどんな性格の人か、今どのような心情にいるか、本当の事を話しているのか、嘘をついているのか、また興奮していないかなどを知るのである。私は、例えばその人がど

んな隠れた悲しみを背負っているかをも読み取る事が出来るのです。」(引用 13) 彼は、心理学からとらえた悲しみ、喜び、生活環境、年齢、人生経験、など人々に与えるあらゆる会話を研究し始めた。「それぞれのちょっとした会話の中にも人生の片鱗が見える」というのがヤナーチェクの主張であった。

言葉の発言の際にとる発話旋律 (注 14) の重要性を常に主張し、後にオペラに大きく反映させたのである。また、民謡のオリジナリティを尊重し、民謡に和音をつけたりピアノ伴奏をつけたりした時、メロディーをそのまま生かし、その曲の美しさと素朴な魅力を壊さないように注意を払い、民族楽器“チンバロン”の音色を、ピアノの演奏の中で模倣したりした。(譜例 3)

譜例 3



ヤナーチェクは、彼の論文「音楽的な観点からのモラヴィアのフォークソング」に (注 15) 自らの体験を次のように述べている。

「それぞれの民謡のあらゆる音符に、楽想の断片がある。旋律からたった一つの音符でも省略すれば、それは不完全なものとなり、意味をなさなくなってしまう事がわかるのだ。民謡は、それが生まれる源となった言語と同じくらい美しく、それが歌われる場所や時期、機会や気分によって民謡の旋律とリズムを変化させる。民謡は、心や精神が一致した時に歌われる。その理由から、数多くある民謡は、稀にしか歌われないのもある。しかし、幸いな事に人々の中には民謡を記憶にとどめている多くの歌い手がいる。彼らは、畑や結婚式でうたい、また恋人達の心を動かし、若い娘達の憧れを察知する。著名な農民歌手の三重唱団は、二夜に亘って 600 におよぶ詩節からなる 58 曲の民謡を私の為に歌ってくれた。まるで一つの歌が次の歌を引っ張ってゆくかのようであった。もし、大気がシナノ木やジャコウソウの香りに魅了されるものであれば、この二夜は私にとって、確かに歌に魅了されたものであった。」

2．チェコ地方の民謡とモラヴィア地方の民謡

現在のチェコは、二つの地方に分けることが出来る。首都プラハがあり、ドイツと国境を境にしているチェコの西側に属する部分をチェコ（ボヘミア）地方と呼び、スロヴァキアと国境を境にして、ブルノの街を含む地域を、モラヴィア地方と称している。

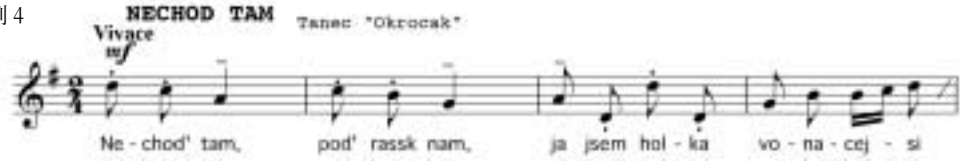
地理的にはさほど離れていないが、過去の歴史や地理的条件を見たときその違いははっきりしている。チェコ地方は、中世の頃から城壁に囲まれた城が街の中に建ち、城の主が独立してその地域を司り王道の街として栄え、庶民の生活が成り立っていた。モラヴィア地方には、今も城は見かけられるものの、それらの多くは城の主が外敵から身を守る為、山の頂上

や崖に立てられ、何ら民衆との一体感はなく村が個々に存在しているだけであった。地理的にもチェコ地方は比較的平坦でなだらか平地が多いが、モラヴィア地方は、山が多くスロヴァキアとの国境近くには、カルパチア山脈が横たわっており農業が生活の中心となっていた。

民族音楽が演奏される時、チェコ地方は管楽器を用いたブラスバンドや、民族楽器“ドゥダ”と呼ばれるバグパイプが使われた。モラヴィア地方では、第一ヴァイオリンが、メロディーやテーマを弾き、続けて即興の形で変奏が繰り返される。第二ヴァイオリンは、ハーモニー付けのみを担当する。その中に時にはクラリネットや歌が、ソロとして加わり、モラヴィア独特の民族楽器チンバロンが、アルペジオや和音で色をつける。これにコントラバスが加わり色彩豊かな音楽を奏でる。不協和音が豪快に響きわたるチンバロンの音色は、哀愁に帯びて金属的であり、狂詩曲風の自由さを醸し出すモラヴィアの民謡にはなくてはならない民族楽器である。

チェコの民謡の特徴は、譜例 4 のように「あっちに行かないで」や譜例 5「私の黄金の両親達」のように、A（四小節）＋ A’（四小節）＋ B（四小節）＋ A で出来ておりそのリズムパターンは、規則正しい。譜例 5 も同じような構成になっており、規則正しい 16 小節のシンプルな歌になっている。

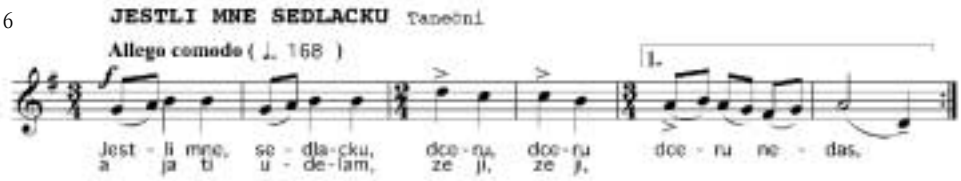
譜例 4



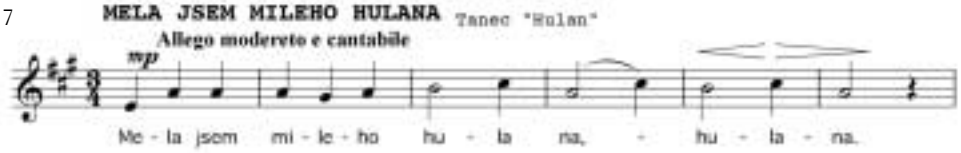
譜例 5

譜例 6「お百姓さん、もしあなたが娘さんをくれなかったら」に見られるように、チェコ地方の舞曲に良く現れる三拍子の中に二拍子が入リ混じっているリズムが使われているが、基本的には同じである。譜例 7「私には愛する槍騎兵（フラーン）がいた」等、チェコ民謡はこれらの例でも分かるように、規則的なリズム、拍子、そして、調性も殆どが長調から出来ている。これらは明らかに舞踏の為の曲である。チェコ地方生まれのＢ.スメタナも作品の中に多くの民謡を用いた。「あっちに行かないで」は、チェコ地方の舞曲「オプクロチャーク」であり、「私には愛する槍騎兵（＝フラーン）がいた」も「フラーン」という舞曲である。(注 16) いずれの舞曲もスメタナはピアノ作品「チェコダンス集」の中に、これらの民謡をテーマとして取り入れ作曲している。

譜例 6



譜例 7



その反面、モラヴィア地方の民謡には、厳格で規則正しい構造はなく、メロディーは自由に歌われ、リズムはより複雑に成っている。調性も短調のほうが明らかに多くなっている。このようなモラヴィアの民謡は、決して舞踏のリズムではなく、フォークソング風な「歌」である。ヤナーチェクの、彼の生まれた場所はモラヴィア地方の中でも、特にスロヴァキアに近く、ラシュコ地域、ヴァラシュシュコ地域、スロヴァキアそして隣国ハンガリーの音楽の影響を強く受け継いでいる。

山、川、谷、野原など自然を描写したものや愛の喜びやはかなさ、又生活の情景が歌われた。独特の地声を使った発声法で歌い、その声は遠くまで山の中で響き渡り、鐘の声やオルガンのようにこだました。その地方の民族の習慣や伝統は日々歌う事によって守りつづけてこられたのだ。譜例 8 & 9「エイ！　山よ山よ、高い山よ。」及び「二つの山の谷間で」は、山の様子を歌った代表的な歌である。広々とした田園の中で歌う歌同様、愛の歌も数多く存在し、ゆったり幅広く朗々と歌うのである。(譜例 10 参照)「僕は、窓の外にたっているよ」

これらモラヴィア民謡の中には、古代ギリシャやビザンチンや装飾音の多いメリスマ的なオリエントの影響を受けており、譜例 11「少年達は出かけています」のように感情豊かで即興的な要素も多く見られる。(注 17 & 18)

譜例 8

譜例 9

譜例 10

譜例 11

3．ピアノ作品「草かげの小径」第一集に見る民謡の影響とドラマ性

おそらく彼のピアノ作品の中で一番ポピュラーなピアノ曲は、この「草かげの小径」であろう。作曲家が殆ど 50 歳になろうとしている時にこの曲は作曲された。

1902 年に 5 曲はハルモニウムの為に作曲され、「スラヴの旋律」と名付けられた作品集に発表された。しかし、第 1 曲と第 4 曲以外はハルモニウムに適さないと考え、後にピアノの為に書き直し更に 5 曲を付け加え、10 曲のツィクルスとして完成させ 1911 年にブルノで出版された。この曲集の中には、数々のドラマが潜んでおりヤナーチェク自身の自伝や回想を見る事ができる。故郷フクヴァルディでの幼い時の思い出や同時期に作曲していたオペラ「イエヌーファ」がプラハで認められなかった事の悲嘆や秘話、また娘オルガが若くしてこの世を去った絶望的な様子が描かれている。モラヴィアの民謡を熟知しているヤナーチェクは、この曲の中にも彼独特の作曲技法を用い、モラヴィア民族の精神や民話も登場させている。

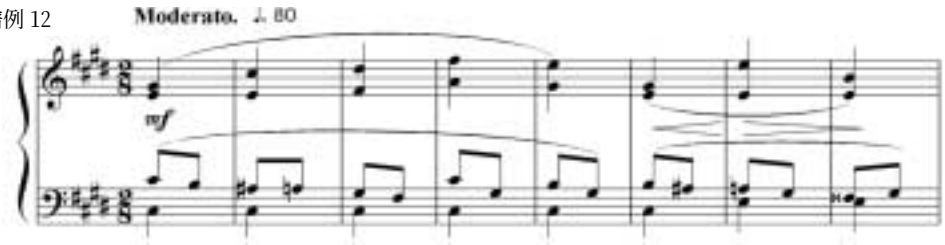
「曲目」(注 19)

1．我らの夕べ　2．風に散った木の葉　3．一緒においで　4．フリーデクの聖母マリア　5．彼女らはツバメのようにしゃべりまくった　6．言葉もなく　7．おやすみ　8．こんなにひどくおびえて　9．涙ながらに　10．みみずくは飛び去らなかった。

1．我らの夕べ　2/8　♩＝ 80　cis moll

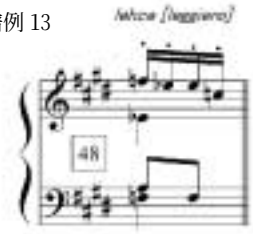
メロディーは一風変わった不規則なペリオドで、モラヴィア地方の民謡の特徴を継承している。(譜例 12)

譜例 12

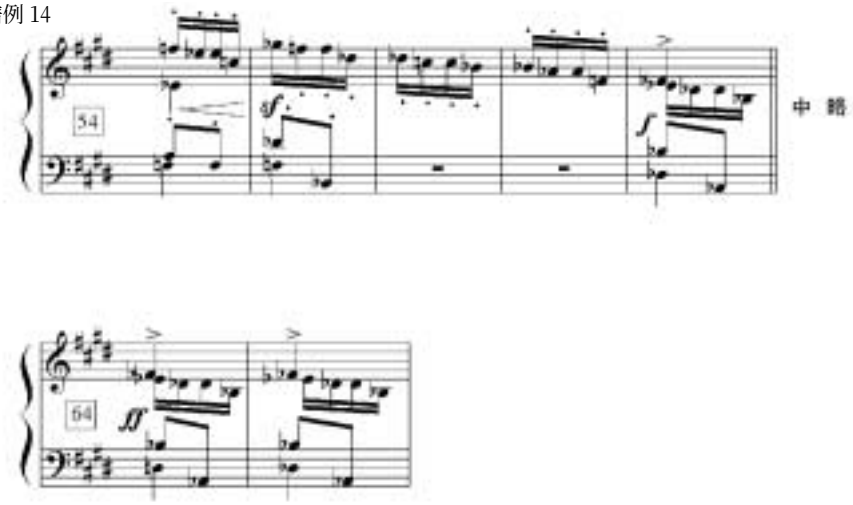


ヤナーチェクの生まれ故郷フクヴァルディの思い出がつづられ、暖炉の前で家族とともに過ごした語らいの状況や 4 歳頃の森の中で大声で泣いた体験がつづられている。中間部では、16 分音符のモティーフ（譜例 13）を繰り返し発展させ、一気にアクセントを伴った ff まで駆け下り興奮した子供の心を表現している。（譜例 14）その後 rit.で少しづつテンポを元に戻し、心の乱れをおさえ、平静を取り戻す。アダジオの右手に再度テーマが民族楽器チンバロンを思わせるオスティナートで、遠い昔への回顧が優しく続く。

譜例 13



譜例 14



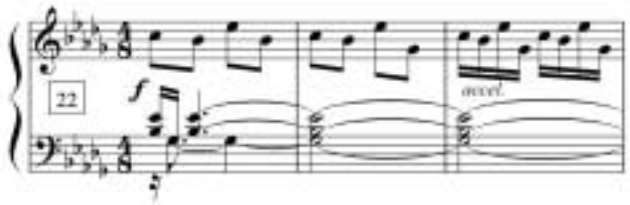
2. 風に散った木の葉　2/4, 5/8.　♩＝ 66　Des dur

ヤナーチェク自身が「恋の歌」であると説明している。左手の素朴な伴奏に As をオスティナート風に響かせ、右手は再び民謡調の叙情的で甘美な 2 小節単位のフレーズの流れでメロディーが歌われる。（譜例 15）

譜例 15

Piu mosso に入り 8 分の 5 拍子になり、音楽の流れは高揚していく。しかし 4 拍目と 5 拍目の 8 分音符をタイで結ぶ事によって、モラヴィア民謡独特ののどかな雰囲気や、高ぶる気持ちを抑える効果をだし、しかも 13 小節では表情を豊かに演奏する事を要求している。22 小節では 8 分の 4 拍子に戻り、8 分音符で出てきた楽句を（譜例 16）すぐ次の小節で 16 分音符の二倍の速さにから tr.に導きチンバロンの音を模倣しながら激しく情熱的な感情に達する。

譜例 16



モラヴィア民謡「スタリー・ホロゼンコフの人々よ。美しい馬をもっているのですね。」は自然の中で歌われる歌であるが、この第二曲目の 18 小節からのメロディーと類似点が見られる。（譜例 17）

譜例 17

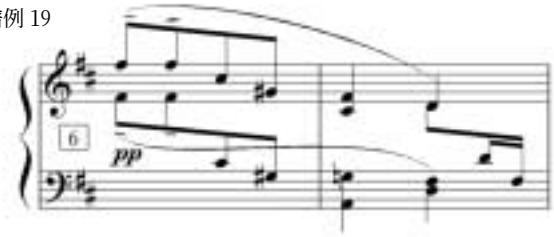
3. 一緒においで　1/8, 2/4　♩＝ 66　D dur

16 分音符の 3 連音符（8 分の 1 拍子）アウフタクトで始まり、すぐに 4 分の 2 拍子に変わる。長短短格のポルカのリズムで少女達が踊っている様子を描いている。（譜例 18）

譜例 18

4 小節目に出てくる短い楽句が（譜例 19）6 小節及び 8 小節に調を変えながら現れる。10 小節や 29 小節ではそれが 2 倍の 16 分音符の速さで繰り返され、いたずらっぽく少女が走ってかけていく様子を描写している。（譜例 20）ただ 2 頁だけの曲中に短い楽句から幾つかの構造の展開が生まれており、ヤナーチェク特有の短い楽句を、様々な音符の長さを用いて表情の変化をねらい、味わいのあるユーモラスな曲となっている。ヤナーチェクはこの曲について「いつまでも閉ざされた頁」という不可解な解釈をつけている。

譜例 19

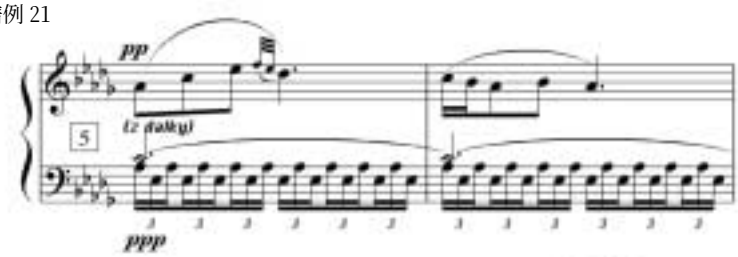


譜例 20

4. フリーデクの聖母マリア　6/8, 9/8　♩＝ 60 Des dur

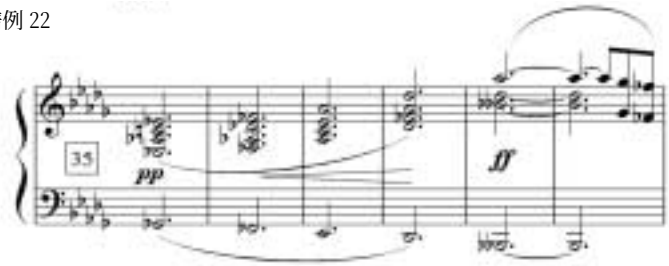
ヤナーチェクの生まれ故郷の近くにあるフリーデクの聖マリア教会で行われた祝典の描写で、モラヴィア地方では 19 世紀から今日に至るまで見かける光景である。敬虔な信者達が、再び民謡風のお祈りの歌を歌い乍ら、教会に向かって列をなしてのどかに、ゆったり近づいて行く情景が描かれている。教会の中でのコラールやオルガンの音色や聖歌が聞こえてくる。(譜例 21) 5 小節から始まる歌はまだ教会に到着していない人たちの歌声。ヤナーチェクは「遠くから」（Z dálky）とチェコ語で書き込んでいる。左手にトレモロを用いる事によって行列の中のざわめきを表現している。

譜例 21



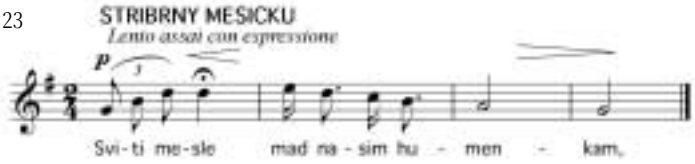
17 小節から信者の声が近づきつつあり、ダイナミックも始めよりはダイナミックスも大きくし、表現は更に豊かにする。作曲家が「近づいている」（blíže）と表記。35 小節 Un poco piu mosso ではオルガンの描写を 5 小節の間に pp から ff までで要求しドラマティックで迫力のある緊張が走る。(譜例 22)

譜例 22



第 54 小節では「心を落ち着かせる前奏が始まり近づいて来た信者達の歌声は絶頂に達する。「近い」（blízko）の標示あり。この曲は明らかにハルモニウムの為に書かれている。（譜例 23 の民謡「月が輝いている」を参照）

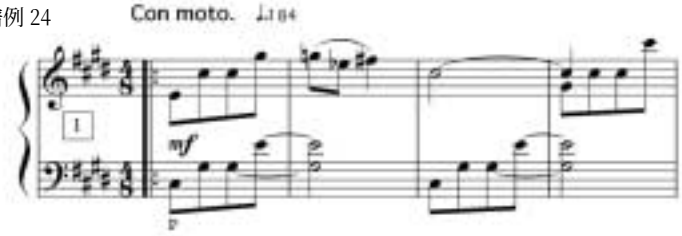
譜例 23



5. 彼女達はツバメのようにしゃべりまくった　4/8, 5/8　♩＝184　cis moll

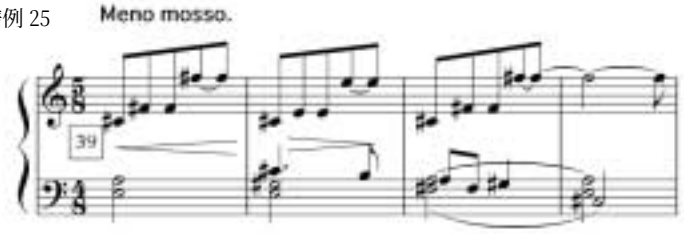
3 度、4 度、5 度、6 度、8 度の音程を頻繁に使い、民族楽器のチンバロンを登場させヤナーチェク独特の手法で「井戸端会議」の様子を描いている。ペダルを 2 小節に亘って使う事によって、3 小節の左手から 4 小節の右手に亘り、模倣されたチンバロンの響きが強調される。(譜例 24)

譜例 24



女性達が市場のあちこちで喋り捲っている様子を描いていると云われている。39 小節目の Meno mosso から 58 小節の adagio かけては 、今まで現れていた短い楽句が 5 連音符になって、思慮深げな表情や落ち着かない表現に変化していく。ここでも民謡からの派生がみられる。(譜例 25)

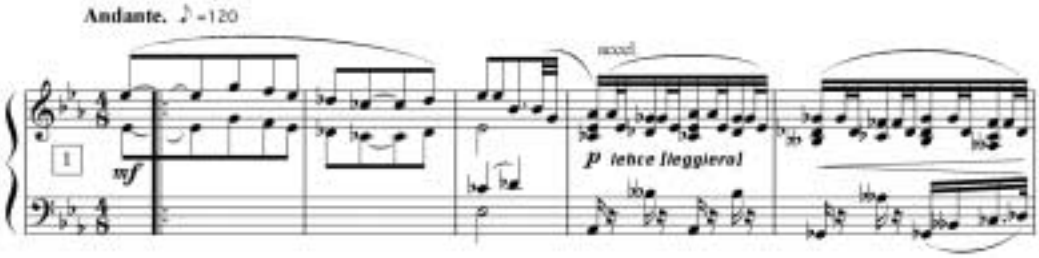
譜例 25



6. 言葉もなく　4/8, 5/8, 2/4　♪＝120　Es dur

この曲集を作曲していた同じ頃、オペラ「イエヌーファ」の創作にも力を入れていた。ブルノでの初演には、演奏家や場所に物足りなく思っていたヤナーチェクは、プラハのオペラハウスに楽譜を送り、上演の打診をしたが受け入れられなく、失意の念にかられた。ヤナーチェクは「失望の苦渋」と手紙の中で訴えている。ユニゾンで始まる 3 小節間は悲しみに打ちひしがれた作曲家の心を現している。Des からシンコペーションで表現する Ces 音に重みを持たせることによって深い悲しみを強調しているのである。しかし、3 小節の二拍目から躊躇していた動きが、4 小節目からは突然不安定な 16 分音符と 32 分音符のリズムで演奏され、決して明るく滑稽な情況ではなく、焦燥感から来る心のゆれを表現している。(譜例 26)

譜例 26



7. おやすみなさい！　4/8　♩＝76　C dur

この曲集の中で、唯一叙情的な素朴な暖かさを持った曲である。(譜例 27)

譜例 27

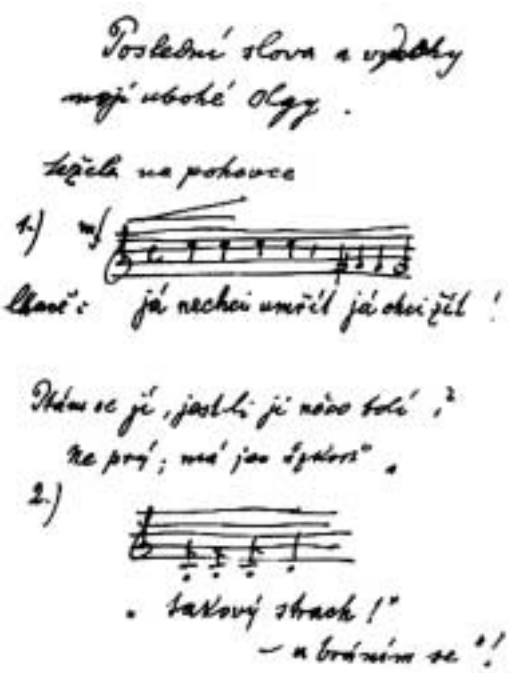
恋人を送った後の余韻を味わっている光景と解釈してよいこの曲は教会旋法「リディア旋法風」を思わせる歌である。

次の 3 曲は 21 歳の若さで 1903 年 2 月亡くなった娘オルガが死に直面した時の生々しい情況や苦渋を表現しており、ヤナーチェクの「ドラマ性」の一面を見る事ができる。

ロシア語の国家試験に合格したオルガは、ロシア語の教師になるべく更なる研鑽を積む為にペテログラードに留学する。そこで病に倒れ故郷に戻る事を余儀なくさせる。「この曲の中に悲しみが見える事と思います。確実な死の予感。暑い夏の夜にこんなにひどく怯えきった天使の存在を。」(注 20)

これは、病床にいるオルガにとって最後となる夏の事をヤナーチェクは語っている。

民謡収集家としてのヤナーチェクは、歌のみならず人々の会話も収集したが、このオルガの死の床においても彼は、オルガの言葉を譜面に残している。(注 21)



私のかわいそうな娘オルガの最後の言葉とため息。

ベッドに横たわりながら。

1.“私は死にたくない！　私は生きたい！”

私は彼女に「どこか痛い？」って聞く。いいえ、ただ悲しいだけと彼女は言う。

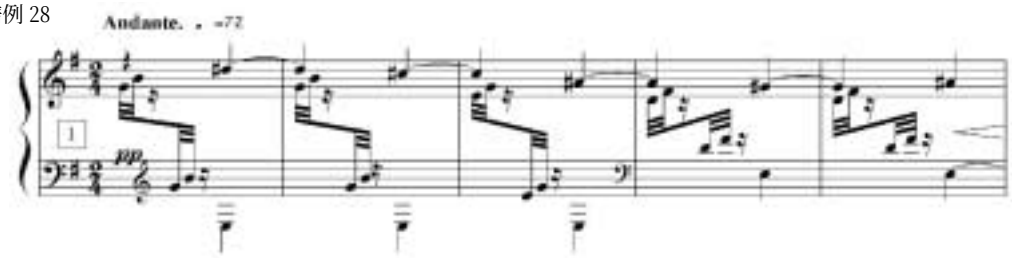
2.“あーとっても怖いの。私、戦っているの！”

井上訳。

8. こんなにひどくおびえて　2/4　♩＝72　e moll

高熱に苦しんでいるオルガと不治の病に対する絶望感、抗議を荒々しく表現している。32 分音符の鋭い短い繰り返しのリズムの伴奏に乗って、2 拍子の裏拍でソプラノのメロディーが一音づつ強調され、不安なおびえた旋律となって揺れ動く。(譜例 28)

譜例 28



多くの accelelando やルバートを使う事にとって、家族や娘の葛藤を現している。32 分音符と 8 分休符は、オルガの早鐘のように打つ心臓の音と動きを描写している。

中間部の poco piu mosso31 小節からは 42 小節までは、Accel.させながら、病気から救いを求める絶叫に近い叫びを表現し、太刀打ち出来ない苛立ちからあきらめに変わってこの曲は閉じられる。伝統的なピアノ曲の常識を破り、むしろオペラに近いヤナーチェク特有

の書法が見られる。

9．涙ながらに　2/4　♩＝180　Ges dur

前の曲と変わらない内容ではあるが、もう、激しく抵抗する事はしないで、望みのない運命を思い、深い悲しみと諦めを歌っている。一つのメロディーの流れは 4 小節からなり、その一フレーズの終わりは、4 分音符が小節を越え次の一拍とタイで結ばれ、2 拍分になっている。(譜例 29)

譜例 29

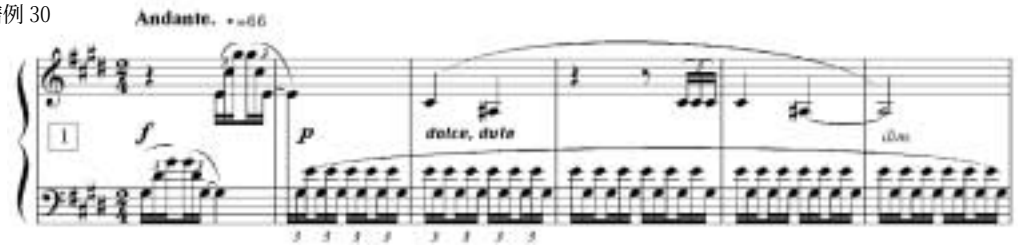
明らかに民謡風で歌う事を意識しており、同じ場所の左手はエコーのようにながれてくる。側にいるだろう誰かが相槌を打ちながら共に悲嘆にくれている様子が見える。

10．みみずくは飛び去らなかった　2/4　♩＝66　cis moll

モラヴィア地方にあるシレジア地域では、「病人のいる家にみみずくが飛んでくると、それは死を招く不吉な知らせを意味する」という言い伝えがある。

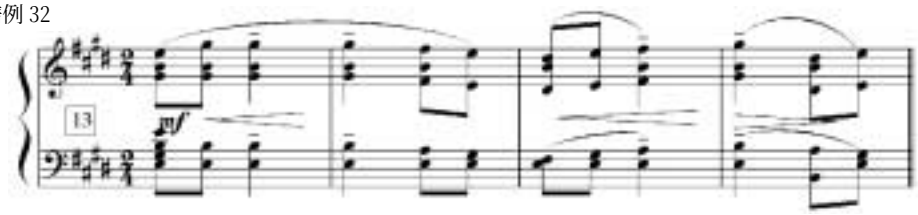
第一小節目にアルペジオ風の 3 連音符が繰りかえされる。(譜例 30)

譜例 30



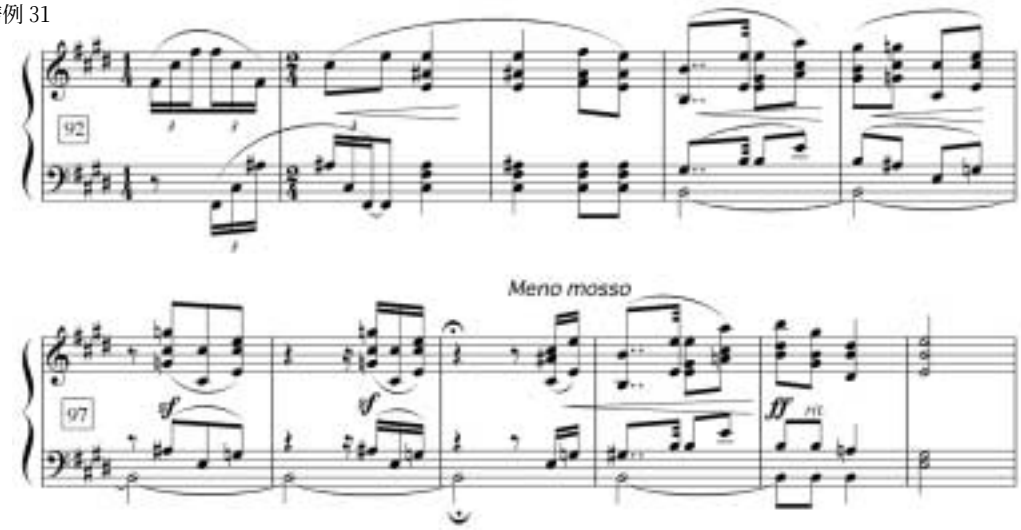
このモティーフは、近寄ってきたみみずくを払いのけている様子を現している。2 小節目の左手に弾かれる 6 度の 3 連音符のオスティナートが不吉な予感を暗示する。3 小節目の右手にはみみずくのモティーフが 4 小節にわたって登場する。このモティーフはヤナーチェクが森の中で実際にみみずくの鳴き声を模写した音符を使用している。様子を伺いにきたみみずくとそれを追い払おうとする場面。mf と指示された 13 小節からは、死の淵から救おうと人々は静かにコラール風のお祈りの歌を歌い始める。(譜例 32)

譜例 32



しかし 34 小節でみみずくは再び舞い戻ってくる。人々は更に声を大きくして歌い、神に救いの手をさしのべる。これらのコラールは、4 分の 2 拍子で書かれており 4 小節の単位で 1 フレーズとなっている。その後すぐ 4 分の 1 拍子に変わり、4 分休符が入っている。歌っている人たちが、ため息と共にしっかり呼吸が出来るようにかかれたものといってよいだろう。しかし、（49 小節）みみずくは執拗にやってくる。しかも、それまで呼吸の為にとってあった一拍の休符のときにも、（63 小節）みみずくを追いやらなければならず、息をつくひまがない。88 小節からのコラールではみみずくを忙しく追い払いながら、神に助けを求めて大声で絶叫する。（譜例 31）

譜例 31



その祈りもむなしくみみずくは居座り、死がやってくる。ここでもヤナーチェク独特の短い 8 分音符の楽句が、二倍の速さの 16 分音符で表現されたり、（参照 97 小節＆ 98 小節）2 つの 8 分音符が複付点をつけた 8 分音符と 32 分音符に変えられ、極度の緊張を引き出しオペラのようなドラマがあり、劇的な終わりでこの曲集は締めくくられる。

4．後書き

ヤナーチェクの作品は何処まで民謡に深くかかわっているかをこのピアノ曲で探ってみた。私が彼のピアノ音楽と初めて接したのは 40 年程前である。決して甘美なピアニスティックなものではなく、理解に戸惑ったというのが、正直な実感だった。チェコの歴史は複雑であ

る。400 年もの間、チェコはオーストリー、スロヴァキアはハンガリーの各帝国の支配下に入っていた。ヤナーチェクは人生の大半をその帝国の元で過ごした。パプスブルグが崩壊し、1918 年チェコとスロヴァキアはチェコスロヴァキアとして独立した。彼が 64 歳の時であった。長い間ドイツ語が重要視されていた時代に、彼は自国語を尊重し民謡を収集し編曲し、周囲からはアマチュア扱いにされながらも伝承されたそれらの曲を自作の中に織りこみ、独自の作法でもって自らモラヴィア民族の保存に努めたのである。装飾音やシンコペーションが多いメリスマ的なメロディーの起源はオリエントから流れてきたハンガリー民族の祖先にある。それ故その流れがモラヴィア民謡にまで影響を及ぼしているのも納得できる。媚びすることなくありのままの人間のあらゆる生き様を音楽の中で表現した結果、ドラマティックな場面が彼の作品の中には多く見られるのであろう。又、モラヴィア民謡は、ヤナーチェク特有の音楽スタイルや作品を理解する為には、大きな手かがりになると改めて確信した。

使用楽譜

Leoš Janáček: Po zarostlém chodníčku, Drobné skladby pro klavír

出版社： Pazdírkovo nakladatelství, BRNO, Česká 1947　校訂： Prof.Vilém.Kurz

Leoš Janáček: On an Overgrown Path.

Edited by Professor Vilém Kurz,

出版社： Master Music Publications, Inc.Boca Raton, Florida

譜例

譜例 1 & 2 ： Dobrý večer!　ドブリ　ヴェチェル 「今晩は！」 ヤナーチェク：人と作品

イーアンホースブルグ著、和田亘、加藤弘和　出版社：泰流社 p.71 より引用

譜例 3 ： Janáček Leoš 編　Národní tance na Moravě. p.13 より

譜例 3 ～ 23 は、Plicka Karel 著　Český zpěvník 1&2 , 500 lidových písní, Státni nakladatelství krásné literatury, hudby a umění Praha 1956 年より引用

< 注及び引用 >

注 1 ： Kvapil L: L. Janáček「1.X.1905」Editio Supraphon 1982 年の序文より。井上訳

注 2 ： Plicka Karel:「Český zpěvník 1&2」出版社： Státní nakladatelství krasné literatury, hudby a umění 1956 年。後書きより。井上訳

注 3 ：同上

注 4 ： František Sušil (1804 ～ 1868)

注 5 ： F.Křížkovský (1820 ～ 1885)

注 6 ： Erben Karel :「Prostonárodní české písně a říkadla」

注 7 ： Bartoš František（1837 ～ 1906 文献学者・言語学者・民謡収集家）

注 8 ： Příbánˇová Svatava: 「Leoš Janáček」p.44　井上訳

注 9 ： Dr.Josef Pommer

注 10 ：「Anleitung zur Sammlung und Aufzeichnung von Volkslieden」1906 年

注 11 ： Vogel Jaroslav: 「Leoš Janáček」Státní hudební vydavatelství Praha 1963 年出版 p.117 より引用。井上訳。

注 12 ：譜例 1&2　ホースブルグ・イアーン著　和田旦、加藤弘和訳　P.71 より

注 13 ： Příbánˇová Svatava: 「Leoš Janáček」Život a dílo, P.51 より引用。井上訳

注 14 ： utterance 音声言語を表出する際にとる行動とその結果生ずる音声

注 15 ： Moravian Folk Songs from the Musical Viewpoint, Czech Academy, Prague 1901. 参考：「ヤナーチェク」人と作品　ホースブルグ・イーアン著　和田亘、加藤弘和共役、泰流社 1985 年 P.66）

注 16 ：フラーンには槍騎兵という意味もある

注 17 ：ホースブルグ・イアーン著（同上）：「ヤナーチェク」人と作品より引用 p.64

注 18 ：メリスマ：ギリシャ語で旋律の意味を持ち、単旋律聖歌において、歌詞の一つの音節に多数の音符が対応し装飾音の多い節回しの歌。本来はグレゴリア聖歌に云うが、似たような曲にアジアのソロの歌、日本の民謡追分歌などにも見られる。参考：新グローブ世界音楽大事典 18 巻より

注 19 ：原語表記：草かげの小径　Po zarostlém chodníčku!

1．Naše večery　2．Lístek odvanutý　3．Pojdˇte s námi !　4．Frýdecká Panna Maria　5．Štěbetaly jak laštovičky　6．Nelze domluvit!　7．Dobrou noc!　8．Tak neskonale úzko　9．V pláči　10．Sýček neodletěl!

注 20 ： Vogel Jaroslav: 「Leoš Janáček」、Státní hudební vydavatelství Praha 1963 年出版 p.188 より引用。井上訳

注 21 ： Trkanova Marie: 「U Janáčků」、Panton 出版。出版社 Nakladatelství Svazu československých skladatelů, Praha p.64 より。

民謡の歌詞（抄訳：井上道子）

譜例１＆２： Dobrý večer! ドブリ　ヴェチェル　「今晩は！」　ヤナーチェク：人と作品 p.71 から引用
イーアンホースブルグ著、和田亘、加藤弘和　出版社：泰流社

譜例 3 ： Janáček Leoš 編　Národní tance na Moravě.p.13 より

譜例 4 ： Nechod’ tam「あっちに行かないで！」
あっちへ行かないで、こちらにいらっしゃいよ。私のほうがいいわよ。

譜例 5 ： Mí zlatý rodiče「私の黄金の両親よ」
私の愛する両親本当に一生懸命育てて下さいました。これから私があなた達にお返しをしようと思っていたのに、兵隊に行かなくてはなりません。

譜例 6 ： Jestli mne, sedláčku「お百姓さん、もしあなたが娘さんをくれなかったら」
御百姓さん、もしも、私にあなたの娘さんをくれなかったら、私は、貴方の娘さんが結婚出来ないようにしてしまうよ。ら、ら、ら、謝肉祭のお祭りの後で、貴方は私に娘を貰ってと頼む羽目になるでしょう。

譜例 7 ： Měla jsem milého hulána「私には愛する槍騎兵いた」

私には愛する槍騎兵がいた。私は銀の指輪も持っていた。私はそれを彼にあげました。

譜例 8 ： Ej, hora, hora, vysoká hora「山よ、山よ、高い山よ」

1. 山よ、山よ、高い山よ。2. 呼んでいる、私の愛する人、いらっしゃいよ、素敵な若者よ。3. 今行けない。それは出来ない、何故なら私は、朝まで馬の世話をしなくてはいけないから。

譜例 9 ： Medzi dvoma vršky「二つの山の谷間で」（自然の中で少女が歌う）

二つの山間で、深い谷で、あそこに通っている私の好きな人よ、

譜例 10 ： Stojím pod okny「僕は、窓の外にたっているよ」

窓の下に僕は立っています。濡れたねずみのように私はびしょびしょです。開けてください。私の銀色の小鳩よ。私は心から貴方を入れてあげたいけれど、ホンの小さな明かりもないの。ホンの小さな明かりもないのなら、我々の目で明かりをつけましょう。

譜例 11 ： Jedú chlapci,,jedú「少年達は出かけて行きます」

少年達は、トレンチン村の国道を出かけていきます。腰にかけた刀が光ったりゆれたりしているよ。

譜例 17 ： Horozenčané, pěkne koně máce「ホロゼンコフの人々よ、あなた方は美しい馬を持っていますね。」

ホロゼンコフの人たちは、美しい馬を持っている。どうやってブルノまで連れて行くの？

譜例 23 ： Svítí Měsíc「月が輝いている」

月が私達の窓を照らしている。少年は窓の下に立ってるよ。私の愛する人よ、開けておくれ。私はドアーのところに立ってるよ。目を覚まして、私の愛する人よ。